

寄稿

インドで児童労働を考える

経済学部国際経済学科の「NGO論」(指導・狐崎知己教授)で、今夏、インドでのスタディーツアーに参加した田中彩友美さん(経済2)から体験記が届いた。国際開発協力に取り組むNGO(非政府組織)活動について学ぶ同授業では今夏、学生18人がアフリカ、アジアなどの途上国の人々の暮らしと、NGOの活動状況を肌身で経験してきた。

田中 彩友美 (経済2)

8月26日からNGO団体ACEのスタディーツアーに参加し、9日間、インドに行ってきた。このツアーは、「インドで子どもに会って考える旅」と題されている通り、子どもの問題、児童労働を一番のテーマにしています。農村部の70%が児童労働をしているというインドに実際に訪れて、現地のNGO機関を訪問したり、児童労働を止めていた子どもたちに実際に会ったり、プロジェクトが行われている村に出向いたり、現地の状態を直接、肌で感じるツアーになっています。



▲ バルアシュラムで子どもたちに歓迎される田中さん(右)

私はアシアの途上国(フィリピン)に住んでいたことがあり、途上国の貧困、特に子どもの問題について関心がありました。専大の国際経済学科に入学したのもそのためです、中学のころから、現地にいき、自分の目で実際に現状を見てみたいと思っていました。それが今回、参加した理由でもあります。

「まず子どもたちの人権を守るべき」

キラキラした笑顔、私はその施設で3日間ほど過ごし、バルアシュラムの生活を体験し、子どもたちと踊ったり、日なかに本場にすいと感じ銘を受けました。また勉強にもとても熱心。10歳くらいの子が自ら新聞を手に取って読み始め、自由時間も図書館で勉強していました。私が、英下の子が、英

本のおもちゃと一緒に遊んだりして、たくさん触れ合いました。遊んで交流を深めるだけでなく、子どもたちに直接話を聞き、質問をする機会もありました。児童労働についての質問は、過去の傷をえぐってしまおうと、正直投げかけられたのですが、そのことを子どもたちに聞くと、「つらい過去ではあるけれど、そのことをもっと多くの人に知ってほしいから質問されても平気」



▲ インドの子供たち

故郷が被災—苦難乗り越え未来へ一歩

牛の目にも涙—東北被災地を訪ねる

横田 香奈さん(文4) 寄稿

牛の目にも涙。3月11日。祖父の家(田村市)で東北大地震で、実家の飼っている牛たちは、周りを聞くことから学生たちはある福島県は地震・津波・原発事故・風評被害の4重苦を負った。



▲ 女川の漁港付近に立つ横田さん

の静かな変化に気づいているかのよとて、そこから学んだこととは大きい。8月のゼミ合宿では、仙台・石巻・女川に行った。復興の文字を眼で目にする。しかし、甚大な津波被害を受けた女川の漁港近くに入ると一気になんともなかった。二階建てのビルがそのまま横たわり、家の表札だけがぼつんと残り、しゃもじや茶わん、湯飲みなどがそこら中に転がっていた。震災から5カ月以上経ったその時も、現場の生々しさは、現場の生々しさを感じた。



▲ 心なしか悲しげな表情の牛たち

なかなかが集まることのできなかったという。しかし、久しぶりに仲間たちと会い、歌い、遊び、無邪気に笑う姿は、普通の中高生と何も変わらない。ただ、次の日にはまたばらばらに散り、別々の暮らしを送ること、同じ古里に帰れないということだけが今までと違っていた。現場に行き、自分の目で見る、人の生の声を聞くことが、何かを知ることとする上で一番大切なことだと思ふ。



専修パワーズ 渡邊 一徳さん (法4)

豪フットボール本場で テレビ出演、観戦も

オーストラリアンフットボール愛好会・専修パワーズの前主将・渡邊一徳さん(法4)は、9月26日、メルボルンで開かれた本場・豪のオーストラリアンフットボールの最優秀選手賞「7」のテレビスポーツ番組「ブラウンロウ賞」の受賞で生放送された。東日本震災で被災した渡邊さんの祖父は宮城県一ルにサインをしてもらった。

「人の命を守る仕事で貢献したい」

トボールを続けてきて本場に良かった。渡邊さんは大学2年次から同愛好会に入り、ポジションはジャンプ力などオーストラリアンフットボールのプレーが要求されるラック。今期、パワー

身で、俳句が趣味。同教... 授が「ベンジャミンの素師につき、10年間勉強し... と (35) ... いたり... だき、... うに練... たそ... NSに... 会です... 興味を... 着... 今年... 時期に... す!... ジをご